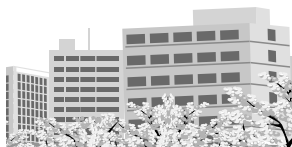


会員の広場



横手に疎開した石橋湛山氏を訪ねて

田川 修司（東京）

65歳から始めた山登りですが今回の夏山は、岩手県西和賀町と秋田県角館町の境に位置する和賀岳（標高1440m）に行ってきました。思っていたよりも山の状況が悪く（藪漕ぎ歩行の連続）暑さで体力の低下、その上に13時間の強行軍でした。次の日は横手の町で休息でした。

横手は、神宿る雪室「かまくら」の街、温もりのある人々との触合いが有る雪国ならではの文化が息づく街。四季折々の豊かな自然のある落ち着いた雰囲気の

街でした。横手は、石橋湛山、石川達三、石坂洋二郎、佐貫亦男（航空宇宙の先達）山下九助（オプラートの発明）金沢秀之助、松井如流、白川白水、伊藤永之介、鶴田知也、マルチンス・M・スマイザーなど素晴らしい人達が活躍していました。横手焼きそば（B級グルメ）を食べながら、そうだ横手は、石橋湛山氏が疎開した場所だ。その「出羽印刷」がまだあるはずだと思いつきました。静かな街に出かけると洋風の建物「出羽印刷」が街の中心部に有りました（写真）。正面の一部は石の壁で窓枠は濃い緑。築100年ほどの建物の流れから取り残されたようなたたずまいに感動しました。石橋湛山氏は、昭和16年に社長に就任し、その後、東京大空襲により、当時横手町にもあった経済倶楽部会員の縁で、本社機能のほとんどを横手に移し「横手支局」を開設しています。そして「出羽印刷」を設立し、東洋経済を印刷するかたわら地方新聞も発行していました。自ら陣頭指揮を執り、戦争の早期終結を訴えるなど「東洋経済新報」を現在地の「出羽印刷」から全国に送り出していました。

石橋湛山氏は横手町民や秋田市民に講演を試み、連

合軍の対日方針と日本経済の見通しについて語り、人心の鼓舞に努め、敗戦直後昭和20年8月25日に横手で書いた社論が「更正日本の針路」前途は実に洋々たりです。「我が国は、なる程従来の領土の或部分を失い、…原子爆弾は今回の我が国の停戦の有力な一原

因をなしたも



のだが、それは科学の産物であり、頭脳の産児である。…今後の日本は世界平和の戦士として其の全力を尽さねばならぬ。茲にこそ偉大なる更生日本は建設されるであろう。」

横手から発信

され戦後日本の指針として高く評価されました。石橋湛山氏は、横手という歴史のある人情あふれるおおらかな土地に暮らしたのでこのような思想を発信することができたのではないかと思います。「世界平和の戦士」として日本は全力を尽くさねばならない、科学立国で再建を目指せば日本の将来は明るいとする見解を述べ、小日本主義の復活を唱えた。貿易の自由さえあれば領土縮小の不利益は克服しうると、しかし政治家の私利心が第一に追求すべきものは、財産や私生活の楽しみではない。国民の間からわき上がる信頼であり、名声である。これこそ、政治家の私利心が、何はさておき追求すべき目標でなければならぬと訴えた。敗戦から78年経ちますが、新型コロナウイルス感染症蔓延問題、ロシアのウクライナ侵攻問題、イスラエルとイスラム組織ハマスの衝突問題などが起こっています。その様な事柄が人々の考え方や価値観、生活様式や行動、そして人と人との付き合い・国と国の付き合いを変えてしまいました。石橋湛山氏がいたら、これからの世の中をどの様に変えてゆくだらうかと考えさせられます。

横手から発信